

■いわて文化ノート

平泉の都市遺跡—志羅山遺跡と泉屋遺跡—

主任専門学芸調査員 鎌田 勉

12世紀の平泉は、中世都市の先駆けと評価されています。初代清衡は、関山に中尊寺を造営し、寺院と居館を中心とした都市平泉の建設を始めました。毛越寺を造営した二代基衡は、毛越寺の東側、現在の志羅山地区の開発に着手し、道路と区画を整備しました。基衡の都市づくりを受け継いだ三代秀衡は、無量光院を建立するとともに、新たに泉屋地区の開発を行い、中世都市平泉が完成します。

平泉町市街地南部の遺跡、志羅山遺跡と泉屋遺跡では、基衡・秀衡の頃の道路跡・区画跡、一族や家臣等の邸宅跡、工房等の遺構が発見されています。

1 志羅山遺跡

(1) 平泉町役場周辺の大型建物跡

平泉駅から毛越寺に至る県道沿いに広がる志羅山遺跡は、商店や住宅・銀行・町役場が集まる町の中枢部にある遺跡です。平泉町教育委員会や県の埋蔵文化財センターにより、これまで100回近くの発掘調査が行われてきました。

遺跡の重要性は、昭和58年の第1次調査で明らかになりました。この調査は、町役場の北に隣接する保健センター建設に伴うもので、5間×4間の大型建物跡が2棟、同じ場所に重複する形で検出されました。建物跡は、四面底のいわゆる三間四面建物で、他の建物につながる



町役場から白山社への南北道路跡(北から)

廊下の柱穴も発見されています。

町役場の東側で行われた第21次調査でも、重複する2棟の大型建物跡と木枠をもつ井戸跡2基が発見されています。建物跡は、規模だけでなく根石・礎板を持つ点、ほぼ同位置で建て替えが行われている点で、第1次調査の建物跡と共通点があります。また、屋根の棟に用いられた可能性のある瓦片も出土しています。

井戸跡からは、底面から完形の中国産白磁水注と曲物製の杓が出土しました。白磁水注と杓は井戸鎮めの儀式の際に置かれたものと推定されており、白磁水注は国の重要文化財に指定されました。

(2) 12世紀の都市計画道路と区画

平泉駅から毛越寺までの県道約500mを対象とした調査(毛越寺街路整備事業に伴う緊急調査)では、道路幅幅分の幅4m程の調査区でしたが、幅約20mの東西道路跡や、平泉町役場から白山社まで

の南北道路跡、屋敷地を区画する区画溝跡、掘立柱建物跡等、都市平泉についての多くの情報を得ることができました。

幅20mの東西道路跡は、両側の道路側溝により確認されたもので、毛越寺前から段丘東端まで続く、都市平泉のメインストリートのな道路だったようです。一方、町役場から白山社までの南北道路跡は、幅が約10mで東に十数度傾いています。この南北道路跡は、町役場から北へ向かう現在の道路と重複しています。

先ほどの第1・21次調査区は、正方位の東西大路と、白山社に向かう南北路が交差する場所に位置しています。柳之御所遺跡の建物跡と比べ遜色がないこと、出土遺物の特異性から見て、町役場周辺は、「平泉館」に準ずるような施設か、かなり高位な者の邸宅が所在したと推定されています。

(3) 池の祭祀と金属工房

国道4号整備事業に伴う第66次調査区からは、幅約10mの南北の道路跡が発見されています。この道路跡は、毛越寺からの東西大路跡と交差しますが、東西大路跡の南は正方位の軸線をもち、北は東に15°傾いている点が特徴です。

この南北路の東側から、小規模な池跡が発見されています。この池跡は、埋没沢を整地したもので、完形の鏡轡や笹とうば・墨書かわらけ・馬の歯等多くの遺物が出土しました。鏡轡は、銅で鴛鴦文



志羅山遺跡第66次調査区の南北道路跡(南から)

(オシドリの文様)が象嵌されたもので、この種の鏡轡は、京都の法住寺殿跡での出土例があるのみであり、平泉の高い金工技術を示す資料です。47本も出土した笹塔婆には、主に神仏名が墨書されており、密教修法に関するものと推測されています。鏡轡や笹塔婆等が捨てられたこの池は、埋没沢と南北路の交差する場所にあることから、「水の道と人の道の辻」における祭祀が行われた場所なのかもしれません。

平泉駅西側の第80次調査区では、埋設された埴塙や金が付着した銅板、銅の切り屑等が出土しました。西側の第37次調査区では鏡の鑄型が出土し、北側の白山社遺跡では、梵鐘の鑄造跡が発見されていることから、志羅山遺跡の東側一帯は、銅の鑄造から製品までを一貫して製作した、金属の工房群が存在していた可能性があります。招聘された平安京の工人が、在地工人とともに「都ぶり」の品々を製作していたのでしょうか。

2 泉屋遺跡

泉屋遺跡は、平泉町市街地の南東部に位置する遺跡で、遺跡の南側は太田川、東側は太田川に注ぐ鈴沢川が流れています。太田川築堤事業に伴う発掘調査では、四面庇の大型の建物跡群や、井戸状遺構等が発見され、12世紀後半のかわら

泉屋遺跡出土の常滑産突帯付四耳壺



都市平泉南部の道路(『志羅山遺跡第46・66・74次発掘調査報告書』岩手県埋蔵文化財センター2000年より)

けや、中国産白磁・青磁、渥美・常滑産の陶器が数多く出土しました。

溝跡から出土した常滑産の突帯付四耳壺は、復元して完存品となったもので、12世紀後半の優品です。また、柱状高台と呼ばれる「かわらけ」をのせる器台の破片が約240点も出土した遺構も見つかっています。それらの破片は意図的に捨てられたものとされ、この周辺で祭祀や儀礼が行われた可能性が考えられます。泉屋遺跡からの出土品は、12世紀後半のものが主体を占めますが、特に第4四半期と推定される出土品が多いようです。

12世紀の道路跡としては、幅約20mの東西大路の延長部分と、伽羅の御所・柳之御所遺跡に通じる南北の道路跡が検出されています。南北の道路跡は幅が約20～22mで、東に約11°傾いており、これを延長すると柳之御所遺跡の南端の堀跡に架かる橋脚跡、柳之御所遺跡の道路状遺構につながります。途中、鈴沢の池という湿地状の大きな池がありますが、橋が架けられていたと考えられます。この大路は、池や湿地や橋があり、東山や北上川の景観が見事だったでしょう。

泉屋遺跡は、柳之御所遺跡と幅20mの道路で結ばれており、検出された邸宅風の大型建物跡や、豊富な陶磁器類の出土は、三代秀衡の時代、ここに「平泉館」に関する重要な施設や邸宅が存在していたことを推測させます。

3 二つの都市計画

ロクロかわらけと手づくねかわらけの量比がほぼ拮抗する柳之御所遺跡に対し、志羅山遺跡と泉屋遺跡では、京都風の手づくねかわらけの出土量が卓越することは、以前から指摘されてきました。このことは、志羅山遺跡・泉屋遺跡が、新たに計画された新興の場所であり、多様性をもつ都市的な遺跡であることを示しているののかもしれません。

二代基衡は毛越寺の東側に、正方位の東西メインストリートと方形の区画による都市づくりを行いました。三代秀衡は、方形区画の西側に、東に十数度傾く南北道路と区画を整備しました。その結果、都市平泉には2つの異なる角度の道路と区画が共存することになりました。東に十数度傾く道路の角度は、無量光院の角度と対応しています。道路の角度が異なるということは、都市づくりの思想の違いともいえます。基衡の区画には、磁北や直線を意識した都市計画がうかがわれます。秀衡の区画は、浄土信仰によるものと考えられますが、併せて湿地や池を意識し、自然地形に順応した都市づくりの意識がうかがわれます。これまでの調査で、平泉の都市づくりの思想が少しずつ明らかになってきました。

9月15日～9月28日、トピック展「平泉の都市遺跡—志羅山遺跡と泉屋遺跡—」で、両遺跡の出土品の展示を行います。